



- 敗戦一年の日、ある復員学徒兵青年の日記……古川 修
- 戦後五十年の中で思うこと……堀江保次
- 泉隆君の思い出を語る座談会(上)

## 敗戦一年の日、ある復員学徒兵青年の日記

古川修

(一九四六年、昭和二年)  
八月十五日 晴。敗戦一年、去

(二九四六年昭和二年)  
八月十五日 晴。敗戦一年、去年の今日正午、あのラジオ放送をきき、晴天の霹靂にもにた感動にとらはれたのであった。  
(福岡第六航空軍司令部)  
管理部兵舎前に兵隊をあつめ、

力足らずして、日本はやぶれたのだ。しかし我々は今日この時より、直ちに祖国再建のために、立ち上がらなければならぬ。我々のこんごの一舉一動は、ただ再建のためのみにあると、兵隊達に話したことを見今も思ひ出す。そして、二時に丘の上に集合して、最後の軍歌を高唱したことをおぼえ

あれから一年はめぐり来ったのである。一年を通した私の思想の歩み、変化を思ふとき、深き反省にとらはれる。敗戦によって軍は解体されると、我々はこんごなにによって武的精神を維持することが出来るか。こゝまで高められた武士道的精神を、我々は今一挙にして喪失しなければならぬとした

復員後も今後の方針も明確にた、ず、百姓仕事のあるがま、に、晴耕雨読といふ有様であった。やがてアメリカ文化を探究せんとし、占領軍の性格等を考へてゐた。

十月はじめの治安維持法廃止、十二月の神道と国家との分離の指令、天皇制に対する自由論議の許容等一連の指令、措置によって、

ら、国民の気風をこの様に剛健たらしめたものを、何によつて支へるべきか。頽廃とエロとグロが来るのでないか。又、国体の護持といつても、護持された國体は、最早、昔日のそれではない。アメリカナイズされ、骨抜きにされた日本は、やがて植民地へと一路ばく進せざるをえないであらう。

終戦後、復員するまでの約一ヶ月近くは、この様な考えを漠然と持つてゐたが、しかし殆んど無思考、無感覚にその日を送つてゐた。これと云つた仕事もなく福岡

づけてゐる資本家、地主、官僚政  
府のあることである。民主主義と  
自由の実現のため、それ故に、勤  
労人民大衆にとつては、敗戦は福  
音でさへある。八紘一字や天壤無  
窮と忠義のことばに、めかくしさ  
れてゐたわれわれは、今にして事  
態の真実を知つたのである。

私の思想は急速に左翼化して行  
き、天皇制に対しは最早断乎之  
が否定せねばならぬと思ふに至

アチソン対日理事会議長の、屢次にわたる共産主義排撃の声明をみても判かる通り、アメリカは我々は人民大衆の味方ではない。我々は冷静にアメリカの性格も見極め、新たなる対策も立てねばならぬ。い。

こうした状勢に力をえた保守反動政府は、新たなる人民弾圧の企

たマ司令部は、大衆のデモ圧迫を宣  
明し、一方左翼論調に活気を呈  
してゐた諸新聞に対し、記事公  
正といふ名目の下に、同じく圧力  
を加へてきたのである。こゝで私  
達はアメリカの正体を、二度はつ

用一田のメーテー、十九田の宮城デモに、人民革命の烽火の高まるを見て胸のあふるるを禁じえなかつた。共産党こそ真に日本人民を窮乏の中より救ひ、祖国を再建するものであるといふ、確固たる者へをもつに至つた。しかるにかかる日本の急激なる左翼化に驚愕

やがて大東亜戦争が聖戦にあらずとして、軍国主義天皇制のたくらめる侵略戦争であつたことを知りはじめ、天皇制に対する問題も、明確なる解釈はつかなかつたが、漸

た。マルクス・レーニン主義に対して理解を深めんと勉強はじめ、最早、單なるディレッタントとして満足出来ざる自分を發見するに至った。四月十日の総選舉に

図を、着々実現しつゝある。再び中世の暗黒にもどる可能性は充分ある。勿論それは神秘思想に充満した敗戦までの絶対主義とは、形ばかりはつてゐるだらうけど、資本家地主官僚的反動支配たることにはかはりないのである。しかし、こうした状勢の変化にも拘らず、私の思想は漸次マルクス・レーニン主義の正しさを信じつゝある。入党的問題については、未だ具体化していないとはいへ、早晚私は党に入りたいと思ってゐる。党としては、何んとしても、アメリカ軍の占領下にあるといふ、現実の事実を深刻に認識し、いささかも志氣沮喪することなく、おくれた人民の啓蒙と組織を、忍耐強く行ふべきであらう。

思へば、私がマルクス主義に対して、同情をもちはじめたのは二十才高師一年（一九三九、昭和十四年、東京高等師範学校—現筑波大学）のときであった。兄がマルキストであつたといふことが、私の思想に対し強き影響を与へたことは否定できない。けれども明確にマルクス主義を勉強しはじめたのは、高師一年も二学期頃ではなかつたかと思ふ。当時はまだマルクス主義文献は手に入った。けれどほんのつか

の間にして、二年になつたころは一斉に店頭より消え、それと共に、極端なる弾圧が行はれ、それはやがてマルクス主義はいふに及ばず、民主主義、自由主義にまで及び、支那事変、大東亜戦争の進行と共に、民族主義、国家主義思想の横行となり、最後は、今でも思い出せばりつぜんとする、あの神懸かり的神秘思想が全日本を覆つたのである。無力なる私達はどうしてそれに影響をうけずにえられよう。東亜協同体について考へ、世界歴史について考へた私は、結局は歴史主義的な考へに落ちたのは当然であった。この根底に一縷のヒューマニズムのにはひがあったとはいへ、戦争を是認し、戦争に協力せんとした。いやそれよりもむしろ、戦争を前提として、そうした戦時生活に於て、如何に自己が誠実であるべきか、こういふ激しい時代に、デカダンであった。兄がマルキストであつたといふことが、私の思想に対しても強き影響を与へたことは否定できない。けれども明確にマルクス主義を勉強しはじめたのは、高師一年も二学期頃ではなかつたかと思ふ。当時はまだマルクス主義文献は手に入った。けれどほんのつか

（一九四〇・昭和十五年）

ゐたのである。

八紘一字や大東亜共栄圏の理念について、つねに思索をやめなかつた。そこにはつねに割り切れざる矛盾を感じてゐたけれど、それを何とかして解決してゆきたいと、努力してゐたのである。今にらずして、侵略戦争であることをして思へば、この戦争が聖戦にあらずして、侵略戦争であることを見やぶりえなかつたことは、何んとしても自分の考への足りなかつたところであるが、それは今にしていへることであつて、当時としては殆んど不可能であつたといつてよい。戦争そのものの性格については、大東亜共栄圏の確立のためといふ範囲内で、大東亜民族解放の為の戦争であるためには、

今行はれてゐる戦争は、どういふ性格をもたねばならぬか、現実にはどういふことが行はれてゐるかを、知る間もなかつたのであるから、いきほひ、戦争の哲学を求め、うちに入らず、誠実に自己の生活をうちたてるべきためにはどうあるべきか、強く生きるとは如何なる生活態度をとるべきか、等といふことについて、いろいろ悩みもし考へもしたものである。戦時に生きる一人の学生として正しく生きてゆく道をつねに尋求してゐたのである。

ふ風に生きえよう。（東京文理科大学史学科）  
ものとして、この歴史の創造に参加せずにゐられるかといふ心持で、誠実を常に生活の信条とした事は、逃遊的行動があつたとしても、反省をし、自ら省りみて生活をしてゐた。

軍隊に入つてからも、私は理想的な軍隊といふものは如何にあるべきか、といふことを念頭よりはなしたことはなかつた。理想的な軍隊、それが私の追求したものだつた。真に自覚的な高度な犠牲的精神に貫らぬかれた軍隊、そういう軍隊でありたいと、私は部下を教育した。私は兵隊の教育のためには、軍人勅諭といふものは、たゞの一度も材料にしたことはない。兵隊の理性をつねにたのみとしたものであつた。「思想する軍人」生に私が応募せざるをえなかつた。そのいふ軍人になりたいと、つねに自己を反省した。その思想が眞に徹底すれば、本当に従軍して戦争否定にまで行くべきであつたと、今は思ふものの、當時として、今は思ふものの、當時として大きな限界であったのである。だ

から軍隊といふものに對しては、今も理性的な軍隊なれば、その存在は許容されると思つてゐる。プロレタリア独裁期に於ては、革命軍をもたねばならないし、大衆の解放闘争のために、武力を行使するとき、自己を犠牲にしうる果敢なる革命的軍人精神は貴いものであると思ふ。帝国主義侵略戦争に追随奉仕する軍隊は否定する。けれど真に人民解放のための軍隊の、存在する必要なる時期はあるのではないか。終極に於ては、人間相互の闘争は排除消滅しなければならぬが、階級闘争が完全に消滅しない過渡期には、大衆をして、ブルジョア階級の反撃から守るべき革命的軍隊の存立は、ゆされねばならぬし、いや必要であると思ふ。そういう軍隊であれば、真に理性的な軍隊であります。國体の問題についても、私達は歴史的にかんがへてゐた。總じて現実の社会と政治に対する関心と批判が欠けていたのである。社会一本に統制されたる當時では、資本主義、帝国主義の分析にまで至らなかつた。しかし今や、すべての罪惡が白日の下にさらけ出さ

れた。私達は正しく考へるものは、そして單なる文化や芸術に逃避しようとしているものは、この現代の社會制度の矛盾と虚偽に、眼をみはらすには、居られないだらう。單なるディレッタントであるといふ筈である。

一年の歳月を省りみて、うたたかんがいにたえぬ。去年の今頃、丁度この時刻は、何をしてゐたろうか。収しゆうえざる混亂があつた。今も世情はこんどんとしてゐる。人民の困窮をよそに、只管反動政権の温存に狂奔してゐる支配階級である。しかも、共産黨の活動は一時に較べて下火である。波はつねにある。我々の正しさを確信してゐるものにとって、失敗はかへって力を与へるものである。搾取なき社会の実現をめざして我々は進まねばならぬ。私自身、唯物論とマルクス主義によつて、鋼鉄の武装をほどこさねばならぬ。私の前途には輝しき希望がある。

すでに立秋はすぎた。夏とはいへど、空には秋の氣配が動いてゐる。大和高原の空はあくまでもすみ渡り、白い雲が一きれ、三きれ南に流れてゆく。あの秋が来つ、ある。大いに勉強しよう。現在の

生活が苦しければ苦しいほど、私は未来に對する希望に、今日の努力をかけねばならぬのである。生活のくるしさに勉強を放擲してはならぬ。

敗戦一年、諸々の感慨が胸中を

## 戦後五十年の中でのこと

堀江保次

私の生年月日は大正六年五月一

日である。今年七十八歳を迎えて、戦後五十年を経る中で当時の光景を思い出し心新たにしている次第である。

大正時代は短期間で終り、大正天皇崩御によって昭和天皇の御大典、また各学校に奉安殿なるものが校門の正面、校庭に造られ、御真影なるものが設置された。

云うまでもなく、戦前の学校教育は教育勅語を基本にして実施されてゐた。思い出してみると、教育の中で、「日の丸、君が代」を中心とした戦時歌曲は当時の青年を軍隊へ鼓舞躍動させ、國家への忠誠心を誓わせる大きな役割を果してきた。私自身も少年期、青年期を通してそのまゝ只中にあつた

去來する。いつも眞実を求めて強く生きること。それが私の唯一の生活信条でなければならぬ。

(旧仮名づかいのまま)

の教師以外にも指導に当たり青少年の軍事教育の一環として力を注いだ。青年たちは、この時代やがて二十一歳を迎えると、徵兵検査が訪れ、屈強なものは「甲種合格」の烙印を押され、国防の第一線の担い手として、天皇のため一命を捧げるべき戦場に送られたのである。その結果、我々の多くの友人は十五年戦争において、「英靈」と祭り上げられ散らざるを得なかつた。

故郷を離れ、死と隣合わせの軍隊生活の中にあっても代々受け継

がれてきた歌曲があった。私が入隊した二十連隊の兵士達の間にもいつの頃からか作者不明の歌が存在していた。私自身にとっても非常に興味を引くものであり、古兵より教わり記憶したものである。

我々兵士にとって、それは哀歌であり、恋歌であり、兵士たちの心情がありありと現われている歌詞である。お叱りを受けるかも知れないが、戦後五十年、風化させのも惜しいという気持ちになり投稿した次第である。そして、この歌詞の中味のようなことが永久に来ないことを願っている。

## 満期要務令歌

私の身の上話すなら  
花の盛りは微兵検査  
親に甲斐性がない故か  
役場の親切うすいのか  
彼女の願いが届かぬか  
数多仕丁ある中で  
歩兵甲種に合格す  
七、八月は早過ぎて  
十一、十二月も夢の間に  
一月十日となるなれば  
数多くの人に見送られ  
可愛い彼女にや泣き別れ  
汽笛一声もろともに

指して行くのは福知山  
三丹一の福知山  
東は長田野演習場  
西は停車場で汽車が着く  
北は由良川舟が着く  
南の丘にそびえ建つ  
西洋造りの硝子窓  
其所に起居する兵隊さん  
軍服姿に身をやつし  
六時の喇叭に起床して  
すぎ洗濯拭掃除  
洗面場に行くなれば  
東を向いて手を合わせ  
西を向いては手を合わせ  
親に変わりが無い様に  
彼女に変わりが無い様に  
洗面済まして帰るなら  
班長さんや上等兵の靴掃除  
涙にぬれたハンカチの乾く間もなく整列し  
班長さんや上等兵の引率で  
堀の訓練場に引き出され  
東を向いて捧銃  
西を向いて担銃  
たまに散開訓練や  
各個教練仕込まれる  
一期や二期はまだよいが  
三期も終りになるなれば  
持切勤務や諸当番  
諸当番ならまだ良いが  
明日は衛兵寝ずの番  
明ければ一日腕に銃

部隊が通れば整列し  
将校が通れば挿銃  
下士官が通れば頭下げ  
面会人の使役やら

西は日曜の事なれば

中でも良いのを首に巻き

週に一度の外出も

こうしてもうけた五円五十銭

腰はゆらゆら由良之助

一汗かいたその後で

笑い話しや泣き話し

貴方は国家に務めの身

私しや此の家に務めの身

共に満期をまつばかり

今日は日曜は必ずと

付けて差し出す巻き煙草

一丁二丁は見送られ

桑の木烟も早や過ぎて

音無瀬橋の真ん中で

巡察將校に見つけられ

何中隊のなにがしと

事やこまかに尋ねられ

最早時間は五分前

之におくれちゃ一大事

自動車に乗るにも金はなし

日頃鍛えた駆け足で

衛門指してぞ急ぎゆく

大阪線の踏切で

又もや列車にさえぎられ

衛門前に来てみれば

最早時間は五分過ぎ

衛兵司令の前に行き

週番下士の出迎えで

特務曹長にあご引かれ

中隊長にあご引かれ

それで済んだと思つたら

お上がりなされと手をとりて

二つに重ね三つに布団

口は水仙玉椿

へそとへそと合釦

足はからりとからみ藤

腰はゆらゆら由良之助

一汗かいたその後で

笑い話しや泣き話し

貴方は國家に務めの身

私しや此の家に務めの身

共に満期をまつばかり

今日は日曜は必ずと

付けて差し出す巻き煙草

一丁二丁は見送られ

桑の木烟も早や過ぎて

音無瀬橋の真ん中で

巡察將校に見つけられ

何中隊のなにがしと

事やこまかに尋ねられ

最早時間は五分前

之におくれちゃ一大事

自動車に乗るにも金はなし

日頃鍛えた駆け足で

衛門指してぞ急ぎゆく

大阪線の踏切で

又もや列車にさえぎられ

衛門前に来てみれば

最早時間は五分過ぎ

衛兵司令の前に行き

週番下士の出迎えで

特務曹長にあご引かれ

中隊長にあご引かれ

中隊長が大隊長に報告し  
大隊長が連隊長に報告し  
遂に二十日の重宮倉

三度の食事も塩の菜

週に一度の入浴も一々歩哨さんの着

剣で  
それも知らずにすちゃんわ

満期満期を待つばかり

作者不明であるが軍隊生活中、  
懸命に覚えたカラクリ節では、  
二〇連隊入隊者の年配者は、想い出していただく方もあるかも知れないと投稿してみました。



## 泉隆君の思い出を語る座談会記録(一)

これは一九六八年の暮に亡くなられた泉さんの業績について、戦前、戦後の泉さんを知る活動家が集り座談会を開いた時のものです。この記録は宮津の沢村秀夫さんが速記され、湯浅が淨書したものですが、京都の民主運動史にとって貴重な記録であります。この座談会に出席された人々も戦前派はほとんど故人になっておられます。それで私も出席していましたから、その責任においても活字化しておきたいと思います。(湯浅貞夫)。

\* \* \*

出席者(順不同)(当時の役職)

田村敬男 京都 国民救援会  
奥田茂雄 同 全日農府連顧問  
品角一郎 同 民主主義文学会

梅本正男 宮津 東 京都 待鳳診療所事務長  
渡辺圭舟 弥栄町 小山真一 同 共産党府委員  
池田藤之助 同 村上中正 ろうあ学校  
野町寺山 17—257、○七七四・四三・一三四七)、湯浅貞夫(京都府船井郡日吉町保野田、○七七一七・二・〇一四六)の両名のいずれかにご連絡下さい。

奥田 わたくし奥田茂雄です。農民運動をやってきましたが、大したことは出来ません。近頃は体をいためて休んでいましたが、少々落ち着いたので出席いたしました。

泉隆君の思い出を語る会  
一九六九年三月九日  
於嵯峨二尊院

自己紹介

会や本誌については、編集部担当の奥田修三(宇治市広野町寺山17—257)、○七七四・四三・一三四七)、湯浅貞夫(京都府船井郡日吉町保野田、○七七一七・二・〇一四六)の両名のいずれかにご連絡下さい。

斎藤□□ 嵯峨  
児島とみ 京都 国民救援会  
數見多喜蔵 乙訓 全日農

泉さんを語る会御参加有がどう御

村上 大変おそくなりました。

池田 宮津の池田藤之助です。旧上宮津村で隣席の梅本さんと共に泉さんにお世話になりました。

座いました。今日の司会は田村、品角、奥田と村上四人でやらせていただきます。

田村 世話を代表して御挨拶いたします。御存じない方に御紹介します。一人娘の君代さん、御主人の四郎さん。お母さんの泉さんは夫人は具合わるく残念ながら来られなかった。御夫婦を前にお父さん

わたくし田村です。今日はどうかお楽に足をくずして下さい。その方が泉君のためによいと思います。堅くならず膝をくずして下さい。まず自己紹介を各自簡単にしていただきましょう。私からははじめましょう。故人との関係はあとにまわすことにします。当時一緒に闘ってきました。俸給生活者組合、労働農民党の田村敬男です。

現在京都のライトハウスで盲人の福祉のためにはたらいています。

沼田重一 亀岡 全日農府連副会長  
高田□□ 嵯峨 「桜餅」主人  
山田幸次 京都 共産党京都市議  
臼井文次郎 八木 共産党八木町議  
湯浅貞夫 船井 共産党八木町議  
栗原佑 熊本 大学教授  
藤谷俊雄 京都 宗教家  
寺西二郎 金沢 石川旧友会  
員長  
山口才次 乙訓 元川島農民  
寺西二郎 金沢 石川旧友会  
栗原佑 熊本 大学教授  
泉四郎 嵯峨 泉隆養子  
泉君代 同 同長女  
東□□ 京都 待鳳診療所事務長  
小山真一 同 共産党府委員  
村上中正 ろうあ学校  
小池昭吾 京都 農民組合書記  
ろうあ学校  
梅本正男 宮津 東 京都 待鳳診療所事務長  
渡辺圭舟 弥栄町 小山真一 同 共産党府委員  
池田藤之助 同 村上中正 ろうあ学校  
野町寺山 17—257、○七七四・四三・一三四七)、湯浅貞夫(京都府船井郡日吉町保野田、○七七一七・二・〇一四六)の両名のいずれかにご連絡下さい。

## 燎原

梅本 宮津の梅本正男です。

渡辺 野間の渡辺圭舟です。

沢村 宮津で御懇意をいたさいた沢村秀夫です。

堀 相楽郡の堀芳次郎です。大正十四年一月農民組合に加入、三・一五に連座、大正一五年當時、泉さんと日夜分かたず運動を共にしました。

斎藤 斎藤です。娘さんを通じて泉さんと十年余りのおつきあいです。

児島 国民救援会の児島です。

小池 農業委員、農民組合府連の専従です。泉さんが亡くなられて父を失ったような感じです。

沼田 農民組合京都府連の沼田です。亀岡市篠町です。泉さんと共に農民運動をしたものです。

高田 嵐嶋で泉さんと親しくしていただいたものです。

山田 京都市会議員の山田幸次です。昭和一年頃、泉さんの下で書記をしていました。泉さんは嵐嶋で地域活動をやられていました。多少ながらお手伝いをしました。

臼井 丹波八木の共産党町議です。泉さんと京都農民協議会をつくりました。ずっと親しい中でした。

湯浅 日本共産党口丹地区委員

長です。終戦直後私の十七、八才の頃はじめてお合いしてのち農民組合でずっと教えをつきました。

山口 わたしは桂出身ですが、二十年ほど前三菱の土地返還運動に来て頂いて、それからずーっと農民運動の指導をいただきました。

寺西 泉君は大正十二年頃、十三年暮以来四五年、じつ懇で、直接接続つきはなくとも親友でした。昭和八年から刑務所生活でしたが、それ以前、金沢四高の学生時代四年間の交わりでした。治安維持法違反で、刑務所出獄後、間もなく金沢でいい戦後京都へ出られ——(この辺不明)てからはずーっと民主運動をやられたとお聞きしている。昨年お目にかかるがこれが最後でした。私は労働運動をやり泉さんは農民運動でした。

品角 戦後すぐに日農が結成され泉さんと一緒に運動し寝食を共にしました。

小山 泉さんは戦前からの知り合いです。

田村 では、故人と一杯やる気で故人にも一ぱいささげて杯を通じて冥福を祈ろうじゃありませんか。これで読経かわりにして泉君の冥福をいのります。

## 戦前の泉さん

田村 一番、泉君の運命を左右した一人の同志がいる。中央の杉本文雄君で、泉君を入党させた党の責任者です。泉君は四十年前に入党しお互いに入獄となつたのに、不幸、泉君の逝去で残念がつておられる。杉本君はソビエットからかえって間もなく党再建のために関西へ来た。泉の入党はその時でした。泉君はまた私の運命を左右した。泉隆はこう私に言った。「もういよいよ運動が非合法の時代に入る限界が来ている。君と別れるのはつらいが、君は本屋に専念してくれ」私は運動の第一線を退くのは残念だが合法性をかちとり、入獄者への差し入れと出獄者の身柄引受けをする事になりました。私は拷問で足を痛めて歩き方ですぐわかる。そういうことで非法活動にヒビを入れてはならない。泉君と私の間はそういう関係であります。泉君の思い出話しを皆さん、夫々語ってほしい。泉君の若いときの顔は君代ちゃんとよく似ています。紳天を着て地下足

袋はきでタツタツと歩く。駐在所の前をわざと「お晩です」といつて公然と通り村に入った。泉君は非常に温和な男で、その中に本当の筋金が入っていた。何ものにもぐらつかぬ、私は頭が下がる。この一点だけははっきりしておきた。今日は遠く金沢、宮津、福知山からも御参會いただいた。堀芳君とは三六年ぶりです。泉隆君のあとをつぶさに語っていただき後に残したい。

品角君の方から今まで、この会をもった経過、事務報告をしていただきます。

品角 小山さんの方から泉さんの偲ぶ会の相談がありました。世話人としてお願いしたのは奥田茂雄、私、山内年彦先生、井上、沼田、地元の村上、小池さんの方々で、第一回世話人会を二月二〇日にもちました。二七日の案内状発送、三月一日第二回目の世話人会をもち、案内状の発送を終りました。今から六年前京都農民同志会を日農関係の方々と共につくり、会長を坂本兵蔵さんで、泉さんと私が書記、坂本さん

は当時お元気でした。今日の会合で農民同志会を確認して本ものにしようということが世話人会で出ました。

田村 農民同志会の再建、異論  
なければ拍手をもって賛同して下  
さい。（一同拍手）

東 待鳳診療所の東です。

田村 戦前の泉君と戦後の泉君をわけて戦前を私、戦後の方を奥田君と品角君が司会することにします。

まず、戦前の古いところから、  
堀芳君口火を切ってくれないか。

九

隆君の思いでを語る会にお招きをうけまして、私は七五才になります

したが、百才になるまで元気で居るつもりです。私が運動に入った

のは小作農民の生活が足を洗い、

本業の農民になるため、私の父も母も貧農生活、骨の髓まで苦し

さを知っている。私は一はん末子に生れ、「われの思うように運動

をやれ」といわれて一生を農民運動にと決心しました。小さい時より

可愛がられて育つたので一直線に

進むれば、森英吉、木村忠一、  
一、杣田貞次郎、坂本兵蔵、学者

先生方はわれわれ農民よりも演説

など上手です。私は木村忠一さんには仕込んでもらつた。「堀君もっともっと伸び伸びとやれ、酒ものめ、仕事もやれ」といわれました。泉さんは学者であり完全な心棒が入っていた。私の尻をたいたたいたり、勿論ひっぱつたりして貰いました。みな勇氣のある人だった。大正十四年一月十六日、瓶原農民組合をつくった。三・一五事件に連座、四月四日に検挙された。このわずかの間に弾圧。

大正十五年（昭和元年）東九条に組合本部があり、常任は半谷玉三と泉さん、委員長は坂本兵蔵、私もカバンを持ってにわか先生格です。各支部の、年貢、土地問題などで、来て呉れと言う。君達の部落で出来ぬなら、そこで寄留してやるという意気込みでした。農民組合を組織して団結してやつたら出来る。私みたいな人間もにわか先生。洋服を買って靴はいて、ネクタイの結ぶ方もむずかしかつた。『堀芳次郎来る』豚箱に入れだろうと言うてサーべル下げて警官がやってくる。それに対しても居の役者のように勇敢にやらねばならない。そしたら大した先生がきてくれるという事になる。

泉さんは頬かむりしてテクテク

歩いて支部廻りをし、さらに泊まり込んでやる。靴下は破れてしまふ。それほど熱心にやられた。われわれは真似ができぬ、敬服の至りです。まあ役者もそろうて共に励ましあってやつたものです。

ひるがえって我々の運動をみて如何に進んだか、現在、谷口善太郎

郎や河田賛治さんを衆議院や参議院におくることが出来るようにな

つた。私は七十五才です。百才まで生きて革命達成まで頑張るつも

あの泉さんの写真を見ると胸が  
一ぱいです。

田村 泉君が達者なとき、こう  
いう会をもつたらと思うた。「泉君

テープレコーダーで君と俺が思い出話しを残そう」といったことがあ

る。学生時代、ナロードニキ、大衆の中へ、理論と実践の統一を身

をもつて実践しようとした。実際の大衆の中に入つて農民の手足と

なり、労働者と共に実践した。指導者者面をせず黙々とやった。そ

の中で最も特徴的だったのが泉君です。泉君と古田遼一郎君(この間二年も経たず、組合の書口

亡くなられた)は夫々、組合の書記として実際に黙々として縁の下の力持ちを務めた。その中で最も業

力持ちをやつた。その中で最も傑出したのが泉君だった。

大正十年九月、金沢四高に入学、大正十三年三月に私は東京に出た。組合運動をやった。泉さんは四高時代、新聞配達をしながら苦学された。私は当時「開拓」という啓蒙雑誌を出したが、泉さんは協力してくれた。中野重治君も表紙などをこしらえた。記事をあつめたりしてくれた泉さんは自身で記事を書いてくれました。

泉君は、四高を出て京大の経済学部に入り、京都で学生運動をやり学連事件で検挙された。大正十五年私は東京出版労組の仕事をしました。大正十四年秋頃、水長の家に書生をしておられた泉君にお会いした。その後泉さんは京都で検挙され四・一六で四年間入獄、京都山科刑務所に入り、金沢へ移って出獄後、能登の方におられたが、金沢へ出たいということことで、昭和十三年金沢へ出られ、遊園地の一角にあった浮浪児の寮の先生をされた。何事につけても非常に熱心に誠意の人でした。富山の方で応召され終戦になつてから森英吉さんから京都へ来たらということで、京都へ出られ農民組合で大そう活躍されたのです。学生時代から先駆者として活動された人です。